毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）のことばを掲載します。

自然賛歌

個性を持った りっぱな草

丸山竹秋

この地上に、雑草というようなものはない、と知ったときは、大きなおどろきだった。そして喜びであった―。

ほとんど都会のなかばかりで生活してきた私は、草というものにたいして、ほとんど無関心でいた。

富士山麓に住むようになってから、ある日、近くの御胎内公園（清宏園）の園長である池谷貞一さんと話しているうち、ふと、私は足もとの草に気がついた。その一本を引き抜いて、「これはなんという名でしょうか。いろいろな雑草があるようですが……」とたずねた。

池谷さんは、その草を一目みるなり、「これはヒメジョオンですね。いろいろな山野草がこのあたりには多いですよ」とこたえた。―山野草！　私はビクッとした。そうだ、山野草。雑草ではないのだ。それまで私は、このヒョロ高いような（二十～五、六十センチくらいの）、どこにでも生えている青い草を、つまらぬ雑草だとしか思っていなかった。そもそも「雑草」とはなんだろう。

例によって辞書をひいてみると、―栽培する作物以外の種々の草、役に立たない草。などと出ている。栽培するもの以外を雑草というのはわかるけれども、いったい、この世に役に立たない草というものがあるであろうか。ヒメジョオンはキク科の越年草で、可愛らしい花が咲くけっして役に立たぬ草ではない。役に立つも立たぬも、それは人の心、あるいは利用の仕方ではあるまいか。道ばたの役には立たぬ草などないのだ。どの葉もどの茎も、みなそれぞれすばらしい個性をもったりっぱな草なのだ。

つくづく思う。世の中に雑草がないように、人の仕事にも雑用というようなものはない。どんな用事でも、それにはそれの意義がある。ただ自分の目の前に生えている草を、自分が直接に必要としているか否かが問題となることがあるように、自分にとって今すべき仕事があるかどうかは、自分が判定をくだせばよい。

いずれにせよ、私たちはもう少し大自然のものに注意したいと思う。そして道ばたの草にも一片の愛情をかけられるような心のゆとりをもちたいものだと思う。そうした心がないとき、私たちは山に行っては山を荒らし、野に出ては野をよごして、土地の人にひんしゅくされるような行為をするのだろうと考える。

ここまで書いてから庭に出たら、小石でかこんだ隅っこの土の上に、ホトケノザと山アザミが同居しているのに気がついた。そのまま外を歩いていると、道ばたのかわいたところにも、ところどころこの草が可憐に散らばって生えている。私はその一本をそっと抜いて部屋に持って帰ろうかと思った。しかしちょっと考えて、そのままにしておいたほうがよいと決めた。きょうは、どの草も折らずに、そっとしておこう―そのほうが心がやすらぐ思いだった。

（著書『よろこんで生きる』より）

え・城谷俊也